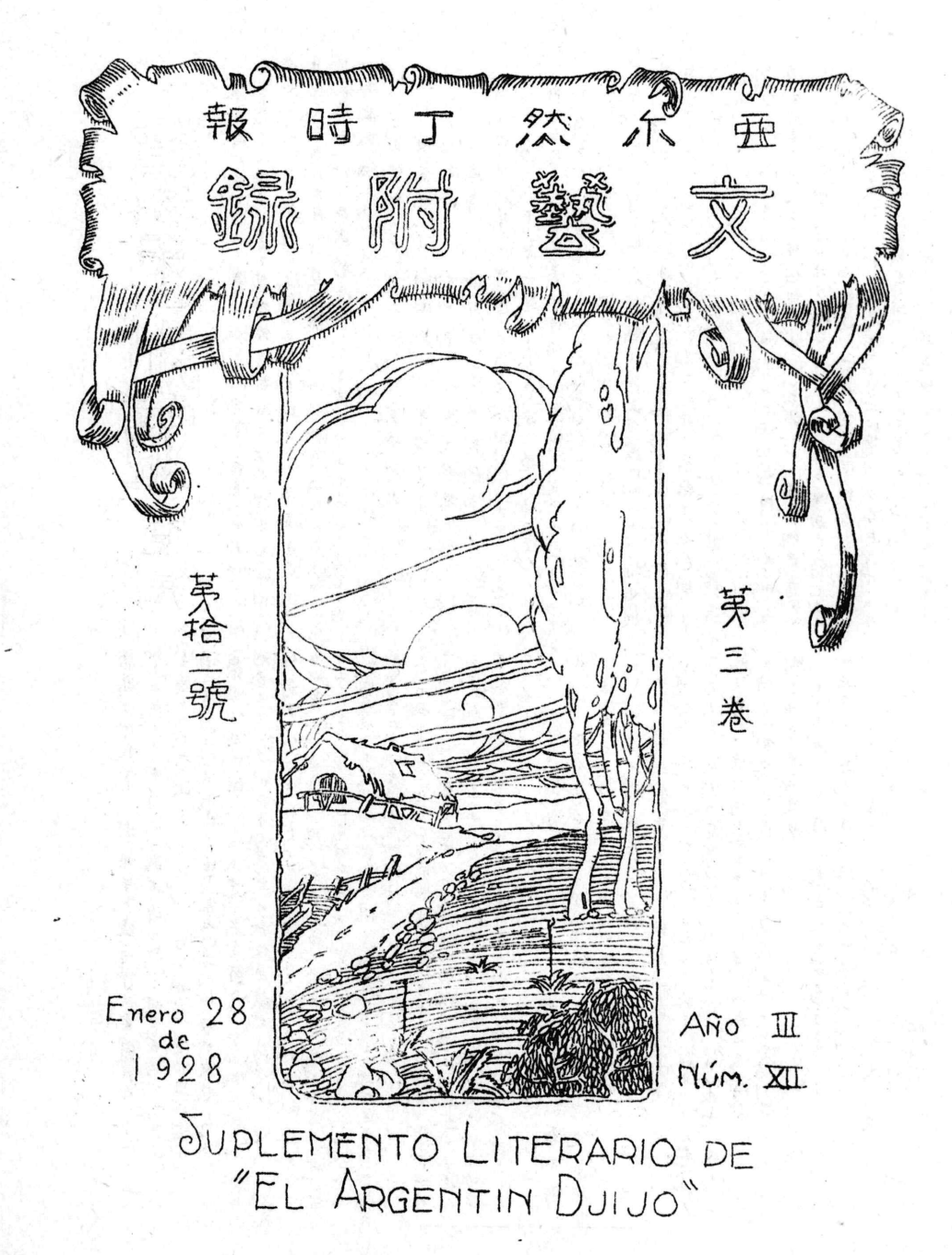

亞尔然丁時報
文藝附錄
第拾二號
第三卷
Enero 28 de 1928
Año III
Núm. XII
Suplemento Literario de
"El Argentin Djijo"

西朝王別姫

楚声

漢の高祖劉邦久しく楚王項羽と互に中原に龍を逐ひしが常に敗れ屢〻危に瀕す。適〻韓信将帥を得て漸く優勢を挽回す。今その計により諸将に九里山の陣を敷せしめ、兵を十面に伏せ李左車をして詐りて楚に降らしめ項羽を誘はんとす。其れ命かな哉、西戦勝たざるかな彼も遂に此の詭計に陥り惨敗戦傷す。

自従我　隨大王　東征西戰
受風霜　興勞碌　年復年年
恨只恨　桑無道　生民塗炭
只恨得　象百姓　困苦顛連

靖は秋、項羽麾下の陣内にて侍女二人詐将李左車を罵り、大王千仞の功を一簣に欠けるを痛嘆し遂に慟哭す。

竹から拳の中より虞姫は侍女の悲愁を見て心穏かならず、通夜まんじりに凡て彼女の忠心より出でしを知り相撫して、霸王の武運の拙きを悲み、その長久を祈る。

姫自らに甲冑を装はしめ陣頭に霸王を援けんとす、侍女頻りに止るに反如、二人の兵来りて霸王の戦傷を報じ尚陣頭に戰へるを具申す。御前をしりぞく兵の私語するを聞きて姫尋ぬるに答へて曰く『霸王の名馬、雖ども傷つき既に廢馬となれり』と

やがて敗れ敗れ身傷つき兵に扶せられて項羽帰陣す、惨敗の憤怨収まらず、劉邦粉砕の事を憂話す、不圖姫の甲冑に心付きその故を問ふに『味方敗軍の報あり、自ら陣頭に霸王を援けんとす』と答ふ。項羽酒を命じ其の悲憤を忘れんとし尚ほ顧客の喪あり『あゝ彼の鴻門宴上に范増の言を守り一の劉邦を刺さば今日の悲何ぞあらん范増よ、范増よ〻〻〻〻今日の敗は是天命と雖も一に謀臣賢士を登用せざるに由る〻〻〻

勝敗は兵家の常、劉邦手下猛将謀臣雲霞の如しと雖も我に八千の兵あり、夕背城一戦砕破せん……假令我敗れ倒るとも我名を汚さんかな項羽！　自ら顧み、嘆じ且大意す。

将に虞姫侍女酒盃を携へ来る、項羽は姫の美徳を頌して、撃柝すれば姫は王の武運千久を祈る。　折しも金鼓の音聞へ物見の兵慌しく来りて漢軍の来攻を報ず、

項羽怒くうちずけど怒気沖天『こがしき韓信奴命知らずの奴輩よ、猛虎に勝る我を知らずやハ〻〻〻憐かな羊の群、酒のみて今に敗さんと叫び、酒を更に酒をあふる。

吹く風いづこよりか淋しき吹簫の音を奇す、項羽その音を聞きて尋ぬるに虞姫『故郷楚が歌かりと答ふ、

王その歌曲を禁ぜんことを命ずれど、左右人ふきを答へて虞姫欄に倚るに、月下楚歌しきりに、望郷の念胸に迫る、楚兵武器を捨て三三五五と去り、呼べど答へず、淋しき楚歌の調のみ。将軍垓楚軍敗敵手兵八千今、十を余すのみと報ず。項羽呼顧惑乱として立ち昌ふ。

力拔山分　氣蓋世　時不利分　騅不逝
騅不逝分　可奈何　虞分虞分　奈若何

姫立つて酒興を添へんと項羽の佩剣を把って

漢兵已掠盡　四下楚歌聲
大王意氣盡　睽妾何聊生

項羽立つて舞ひ、舞ひ終らんとして自刎す、侍女つづいて之に殉ず

一しきり哀れ故郷の楚歌聞ぬ、『嘗ての大名、今や一敗地に堕ち、天の命が、嗚呼何の面目ありて江東の父老に見えん』と

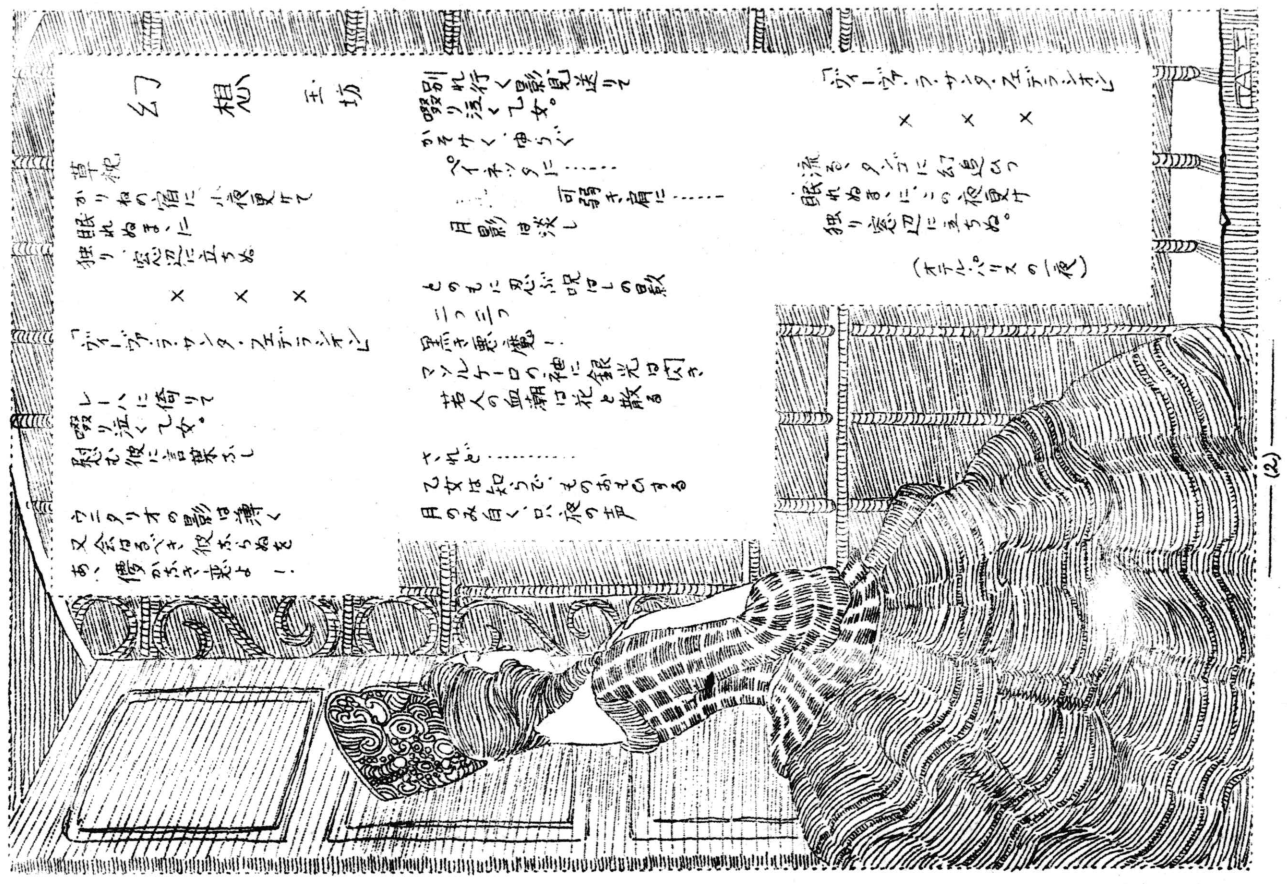
と椅子に倒る『我が此の力そと』鹿まんとして踏蹉ひ倒る、

創を抜き身を伐げ

『出陣：出陣：馬を我が騅馬を！』

叱咤すれど答ふるは只風々ひゅう秋風のみ〻〻〻あゝ〻〻〻

（完）


幻想
玉坊
独眠りされぬまゝに
窓辺に立ちぬ
× × ×
「ゴーホ・ラ・ナタ・ズ・ティラ・ネン」
慰めの言葉ずし
彼に吸ひ寄せ
月乙女は知らぬ
月のみは白く
月影は淡し
可弱き肩に……
ペイネリタに……
ともに思ふ呪はしの歌
マンルナーロの袖に
花銀光は閃き
散る
「ゴーホ・ラ・ナタ・ズ・ティラ・ネン」
× × ×
眠れぬまゝに
窓辺にたちぬ。
(オルペウスの一夜)

西貢乃夏（想ひ出）

土井 氏

佛領・西貢の夏の夕べは靜かだった。

西貢の流れに水の湯ち溢ちて、夢の様に浮ぶ小舟が中には、お人形し顔の安南土人の漁夫達が、ほのかなる灯のあかりの下でよく熟しゆった西瓜を切って赤い果肉の中から黒い小さな核きぼろくと落しては親父もお袋も子供達もみんなで頬のあたりき、核ひろがらうまそうに喰ってゐるのが如何にも夏の夕べにふさわしかった。

夕映の名残りうせて宵の明星のまたたく頃、しづくと夜の帳の迫り来る頃、音もなく流れ行く南国の河は物凄い程に黒ずんでくる――その中から時々、水面の間近かに飛ぶ蚊きとうえやうとしてか大きな魚がだしぬけに半身を空中に現はし白い腹を見せては跳ね返して横がり行く波紋きのこと。

淡天の妻の「餌の仕度ゥまして揺て居る野菜の切々等下へ下えと流れて行く……。

南国の月の出の鮮けさ――藝術の国、流行の国、フランスの文化の粋をこうして建てたのであらうと思はれる、屋根赤く壁白く、あたりの緑葉との調和いと面白き清楚なる建物の二つ二つの半面を照し出づる十四夜の月の出しほは本當にしづかであった――河辺につづく中貨の街道を往く自動車、馬車、人力車の中なる人々――それは淡るやうな水色の薄く軽い裝ひの下にまろやけくも白き節の美きしのばせるフランス美人、そして、鼻すじのよく通った口の締った如何にも悠然相なる男達が、大魚、小鳥のやうに活潑で無邪気な可愛い小供達きフルて食後の散策に赤き退ふ人達であった。

河岸にいかり色下してゐる汽船の甲板で白い夏服の船員が喋る左わいふい喋も何とかく故の空だと思はせた。

次第に登りくる月下の世界に一しきり往き来した人の群、自動車、馬車のひびきかどの遠絶え行く頃、河辺には夏の虫がしづかに啼くのだった、そしてあちこちの青い光りのもれる窓からも女が弾くピアノの、高ふ声はゆるやかに遊ぶが茫然に溶けて行くのだった。

うかだれ勝ちに耳澄ますもの、魂に喰入る程に一入強うひびき渡る声――それは河岸に眠り深う建つ倉庫の赤――夏の日のほてりのまだ冷めやらぬ――に腰下ち安南土人が吹く節哀れなる横笛の音であった。

国亡びて山河あり――国滅びしと言ふにあらねど豊沃なる西貢の野き痩え米の産地として栄ゆる港きあたらフランス人の手によって左右せられぜばならぬ安南の土人がせめてものなぐさみに吹く夕べの笛の音は哀れにも亡国のうたとしか聞えなかった――。

西貢の流れは無心に流れても行かう、草木に心もあるまいきめ小、ほしいまゝかるるきゥびやかさをみせつける他国人の下に枕する処さえ持たで生き行かねばならぬ善良なる人々に果して無心で面白く笛が吹けやうか？

同じアジアの種族が然りせ男文化の發祥地、世界三聖の一人きさえ出してゐる老大国支那の哀れなる今の運命を思ふ遊子が胸はやるせもなかった。

月は無心に照し流れは淀みなく逝き星は無数にかゞやく故の空ぐ夜半にきくたえ〳〵の笛の音は、心ある人間の淋しさ――心がなかったらいつまでも〳〵なんのことなくて良位きにつく水の流れのやうぐあらうれるであらう――といったやうな、とりとめもない焉鹿気たことをさえ考えさせたことであった。

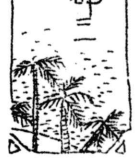
× × × × × × ×

あの静かな西貢の夏の夕べのありさまは五年を過ぎた今日でも忘れられぬ印象のなぐ〳〵き思出させてくれるものである。

（き はり）

スラバヤの星

美都三



種族も異にする民族と民族との爭鬪ミ個人が表面的に形を現して居ないとしても何時の世、何れの國でも無數の痛ましい悲劇を生むものである。一民族として他種族の支配の下にある位、人間にとって、より大かる苦痛と屈辱はない。そしてこの苦しみこの屈辱は常に血に燃める若人に依って雪がれんとするものである、実際若人の血は彼等きして感激せしめこの感激は奮起せしめ、この奮起は驚れてのうやむ迄の戰ひをかさしめる。　現今南洋に群る島々の中のジャワには幾つかの革命秘密結社がある。そしてその若人は常に自由に向って努力し突進してやまぬけれ共彼等の仕事は困難である、血の出るやうな、然リ本當に全身全力の爭鬪である。

次の短篇はジャワに於る代表的秘密結社、サリカット・イスラムの一領袖にまつわる悲壯かる運命を物ったものである。

(S・I)

× × × × × × ×

常夏の國、南洋のやし繁るジャワのウオ/レジョーのサロン手工場の午後は何ともなく物うい眠たいやうな空気が漂ってゐた。そこに働く無学かる職人共はつい二三日前に脱獄したアストロの話きしてゐる

『チエ!! アストロって余っ程お目出度い男だネ』

『何故の?』

『何故って何不足ない身を持ってて勝手に革命ちこもの　とかあやリかけて牢屋にぶち込まれるかんてその気が知れんぢやねえかね』

『ここここ』

やがてマホメット教徒達の礼拝の鐘も過ぎて人夫等の歸って行く頃戸外で「ウオ/レジョー」の名を呼ぶ者があり、それはまがうかたなくアストロであった、二三日前に脱獄したアストロであった。

主人は彼を喜び迎えて自分の家に隠そうとする、けれどいくらして拒付かず、アストロは『俺は如何お前を信じてゐる、然し一寸も油断が出来ない。俺はわが同胞が権利、自由を獲得して母国を地上に建設する日が来る迄は家いる小屋一つ持ったくない一魂の土もいらん、今は唯生命をつなぐに足る食料と水を呉れば十分である』と頑張って聞かない。主人も止むなく着物を與へ、食べ物を買ふために外に出て行った。

突如、意外で大の書記き立聞しゐた刑事のオスマンが飛び込んで来た、逮捕せんとする刑事のオスマンとアストロとは格闘となり、遂に刑事は組み伏せられてしまった、そこえ歸って来たウオ/レジョーはこの有様―かっては親しがりし友と友の相組んでゐる―を見て驚き呆つ驚き引分けやうとする。アストロは微然として叫ぶ出すやうに言ひ放つ、『ゐる之友情を裏切る奴、犬!!人はしめ殺してやうねばならぬ』色きかせるオスマン又怒鳴る『革命家の友は俺にかい、外に警官の来てゐるのを知らぬか?たわけ者奴』ミミミミ怒号又怒号、ミミミ折しも何処よりか『スラバヤの星』を唱ふ、かつかしの声が流れるやうに聞えてくる。直に警官どしかがら聞いて居たウオ/レジョーは言ふ

『オイ、オスマンよ　アストロよ待ってくれ、あの歌が聞えぬか、俺等三人が共に若かった頃何回とかく歌ったあの歌、『スラバヤの星』がミミある程アストロは革命家で脱獄犯だ、併しその爲さんとする所は吾が民族のためではないか、帰るる処俺達のためではないか、民族の血潮にみふぎり流る、生命の力ミミ民族の歌ミミミ高く低く強く弱く夜の静寂を破ってひびいてくる民謡

『スラバヤの星』

これを聞いても尚同じ民族、昔、幼かりし頃、若き時の友と相爭ふことが出来るぐあいうかの、昔の友アストロ、革命家アストロを抱えんとしてゐるオスマンの心の底にしみ込んで行く民謡のひびきは彼の鬼のやうな心を溶いた、そして二人は相抱いて泣いた、――

天空には銀砂のやうな星がきたくミセがてアストロは何処えか―(完)

詩

夏の雲

てツ弥

雲が現らはれた
砲煙の如く
空の一角に

それが
何にか無氣味な
獰猛のやうに見える
と
轟が
地をつたへて来る

耕す人は
畝に立って
野も林も小鳥も
ほんとうに虫けらまでがミミミミ
―緊張と恐怖の一瞬時―

靜かだ
實に
靜かだ

おもひ

京太郎

夏の夜に
君を待つ間の
やるせなさ

思ひあまつて
爪びく糸の
可細い音さへ
ここここここ

え、
しまんがい。

さびしく疑ふ

てツ彌

夏に
美事に生長し行く
おそろしい毒草

やさしい野花に
猛悪な彼

偶然とした足つきで
雲が湧き上った。
―エネーロ―

されど
自然は微笑む

野に
美事に生長し行く
おそろしい毒草

一人の人間が
彼と彼を
さびしく疑ふ

童謡一つ

葉蔭

芳枝さん
お前の
母さん何を
父さん早く
神にお祈り
お手々合せて
ちたしミフに

今日は
生れ日よ
話したり
呼ぶ様に
しませうと
願ったウラ
ありましたと。

白雲

三太郎

空に流る、
あの白雲の
ふわ〳〵と
たわいない

「度俺の恋のやう……

夏五題

（メルセーデスにて）

尭民

△

曠野に遥しかく
みどりはつゞく
緑は—

青きみどり野を
汽車は行く
汽車は—

窓外に雨
雨はけむり
みどりは雫す、
あゝみどりは……

△

ルハンの流れ
しずかに—
パルケ、センテナリオに
夏の香りは高し

空は地に
地は空に
みどりは燃えて
白雲は峰をなす、

友、大自然をめでぬれば
我、黙して之を聞く
あゝ自然の前に
人の子は伏す

人の子は伏す。

△

ユーカリの樹々静かに
セイボの花かほる處
田舎の乙女はたゞずむ
その瞳、その髪、淋しともさみし

曠原に育ち行くて女子に
東の旅人の情調はみだる
我も又淋しき子、人生の放浪者
寂しさは田舎にあり、そして乙女にあり。

△

あかねさす夕陽（ひ）に
樹々のみどりは輝やく

『ティヘリータ』の二つ三つ
無心に飛ぶも哀れ

友言はず我語らず
夕陽は沈み行く—

牧草をのせて
かえり行く田舎人

顔に夕べの色静か
わだちのひゞき—

『ミレーの畫のやう』
たて生は語る
—たゞこの一語—

△

ものかべて
いと
眠り深う

モリーノの音
のみ
身にしむ

あれ!!
南十字
の星が

南—
南はるかに
流れ居の我、

故郷は
遠し
幾千里……

南十字の
星はまたゝく—。

一人一語

▲年が改つて忙がしい生活が訪れました。休みました　角笛

▲去年休業つづきだつた俺公き編輯子がせめることせめること『今年は貴様の獨り舞台のつもりで書けつてか筆法でか……そんな小言で一向こたえはせんが聊か編輯子が可愛相になつて来たんで本当が書いてやることにした工ヘン……
但し至つて気まぐれな公のことだから大して當にはならんとの公自身が思つてるが不……　美都三

▲編輯子がしばらく振りで表紙に麗筆をふるつて繪き書け、かんてあだてますのでつゝのせられて鉄筆き採つては見たものゝ何しろ久しぎに回つて筆とうかかつたので思う様に手がうごかず出来ばえはお覧の通りです。これも『あだてもてかせた編輯子の罪』です序に申上ますがこの繪はこの間同人達がメルセーデスに出かけた時、郊外で味つた『夕映えの感じき現さうとしたものです　大て生

▲この間メルセーデスで松き傾けたんで大分『左のき』がつかれたので心からうまも左の手は筆休むことに致した次第、併し原稿きかくのは右の手かんだが想きひねくり出すのは人並に我輩の頭からちんで結局左の手がつかれたということは取も直さず我輩の明敏からぬ頭がつかれたということ……
休業の申訳きかすこと依如件　左の手

▲過ぐる日メルセーデスはオテル・パリ入の一夜――凡てがきめかしい感じのする田舎町の宿。殊に赤みを帯びた鉄の格子のかかる窓からもれる夏の淡い月光も知らず眠る夜のいびきの外、四辺静かさ消、やるせなさに包え、しよんがり出て床きはかれて独り窓辺によつた王坊の耳には外がよく口ずさむ
Viva la Santa Federacion!
の唄がひびいてるやうに思はれてからかかつた。
さてはペイネッタ戴く中世紀のみやびやかなる婦人……吸り泣の咽び……剃客が手に閉く花首の光り……鮮血……王坊の幻想は今より八十年の昔アルゼンチンの戦国時代の血かまぐらさが中にも美きそゝる物語り、甘いローマン入のくさ〳〵かんぞを描くのだつた……その幻想をかいたものが本号発表の名詩(迷詩)でも
但し風の方はあの夜スやくと眠つてた、たゞ生に描かせやや描いて貰つたんです、どうです詩はまあ別くして風だけはゝくせう……　王坊

▲王坊の『幻想』とやら、読んでみましたが、何故とかうばだ不可見玉花外ぶりの詩なだ[illegible]リ悦に入つてたかうだ、併し王坊もえうくかつた[illegible]パリ入の一夜を眠むりもせんで見に角詩想を水のだけにむつたから……　三太郎

▲七子氏の玉稿を待ち、てつ弥氏の詩きありがたうございました　（晃　氏）